AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2022 年 1 月 25 日　VOL.45　第 300 号　定価 550 円
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709　口座名：特定非営利活動法人アムダ

2022 年
冬 号
冬

救える命があればどこまでも

新春のご挨拶

AMDA 理事長　菅波　茂

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルスによるパンデミックに加え、国内外で多発している災害被災者支援活動に明け暮れました。この対応ができたのも皆様方のご支援の賜物と心から感謝しています。

AMDA は、「困った時はお互いさま」の相互扶助の精神を大切にしています。2020 年にマスクが日本のみならず中国でも不足した時には、AMDA ネパール支部が北京日本人倶楽部にマスク 1 万 6,000 枚を直接送ってくれました。ネパール政府がマスクの海外輸出を禁止するぎりぎりのタイミングでのことでした。

AMDA インドネシア支部タンラ支部長と（2018 年）

あまり裕福とは言えない AMDA カンボジア支部からも、温かいメッセージとともに、2,000 枚のマスクの寄贈を受けました。リティ支部長の人脈と AMDA の活動の神髄を感じました。これにより、AMDA は国内における災害支援の協力提携先、そして大規模災害時の協力医療機関で感染予防用の物資を希望されていた合計 42 の医療機関にマスクと消毒用アルコールを提供することができました。

国内の新型コロナ対応では、北海道旭川市、岡山県、沖縄県等の自治体からの要請を受け、看護師を主として派遣。彼らが持つ医療職としての使命感には、本当に頭の下がる思いです。

海外では新型コロナ感染拡大防止のための厳しい規制の中、大規模な自然災害が次々と発生しています。特にインドネシアとフィリピンでは、豪雨や台風による被害が頻発している状況です。災害時に緊急支援活動を行う場合、そのほとんどは AMDA 支部単独の活動ではなく、支部長や顧問の貴重な人脈を活かした合同活動となっています。

彼らの人脈が具体的にどのようなものであるか、私個人は詳しくは存じ上げません。しかし、災害時のようなひっ迫した状況になると、様々な人や団体との協力体制が自ずと形成されます。AMDA は「ローカルイニシアチブ」というコンセプトを大切にしています。それは被災した国にある AMDA 支部による解決方法を尊重することです。

尚、AMDA の 1984 年設立から現在までの活動の集大成となる「世界災害医療プラットフォーム：アジア・大洋州版」を目下構築中です。このプラットフォームは国連、各国政府、各国医師会、大学、NGO および NPO、公益団体、企業の 7 者連携によって構成されるものです。次の機会には、皆様方にその詳細についてご報告したく思っています。

フィリピン大統領府にてエバスコ長官と（2017 年）

本年も世界の人たちと協力し合って頑張ります。ご支援をよろしくお願いします。

岡山経済同友会主催「教育フォーラム」に AMDA 理事が参加

2011 年から毎年、計 6 回、一般社団法人岡山経済同友会より、「大学コンソーシアム岡山」と連携して募集した大学生ボランティアを、AMDA が東日本大震災や熊本地震の被災者に対し支援を行っていた活動地へと派遣していただきました。

去る 2021 年 11 月 18 日、これまでの災害の経験をもとに南海トラフ災害などへの対応を考えることを目的として、第 21 回教育フォーラム「絆をつないで ～被災地での奉仕活動から 10 年～」が開催され、AMDA 理事の難波 妙が参加しました。

自身の故郷、熊本県益城町にて熊本地震被災者支援活動を行った難波は、基調講演にて、ローカルイニシアティブ（被災地主導）で子どもたちの日常を取り戻した大学コンソーシアム岡山の活動を紹介し、学生が災害支援に関わることの意義などについて話しました。

その後のパネルディスカッションでは、難波のほか、被災地で復興ボランティアに携わってきた方々や専門家が参加し、東日本大震災、熊本地震、そして 2018 年の西日本豪雨での経験、気づきや知見を発表。今後の災害に対し、「経験した先人らからの話を聞き、共感し、次に生かす」、「人とのネットワークが災害対応には必要不可欠」など、多くのヒントが出てきました。

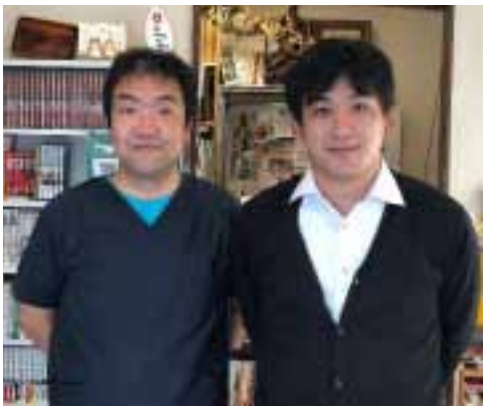
フォーラム終了後、岡山経済同友会 日下 知章 教育・社会貢献委員長は、「岡山経済同友会と大学コンソーシアム岡山、そして AMDA がスクラムを組んで学生ボランティアのチームを派遣する方式は、全国のモデルとなるもの。フォーラムの中で取り上げられた教訓や提言を、今後の防災に役立てたい」と話されました。

（GPSP 支援局　総務担当　ブルックス　雅美）

AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム

昨年に引き続き、コロナ禍のため、多くのイベントや県を越えての移動に対して様々な問題がありましたが、2021 年 10 月 31 日（日）、高知市総合防災訓練が行われるとのことで、高知市から AMDA に訓練参加の連絡がありました。

体育館内で行われる総合防災訓練と小学校のグラウンドで行われる各種体験訓練があり、AMDA ではグラウンドでの訓練に参加する予定でしたが、前日からの天候不良によりグラウンドの訓練は中止となりました。今回一緒に参加された鍼灸師の林篤志様と体育館内での訓練を見学し、現在進めている高知市内での準備状況や拠点等の位置関係などを見学した後、高知県鍼灸師会の防災担当者と面会しました。



左：高知県鍼灸師会防災担当（福川　裕徳）
右：西明堂林鍼灸院（林　篤志）

また、11 月 28 日（日）に徳島県阿南市で行われた防災訓練には、AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関が参加してくださいました。

阿南市の支援に入る医療機関として、長野県の茅野市、原村、諏訪市の組合立諏訪中央病院から医師 1 名、看護師 2 名、調整員 1 名の計 4 名ならびに AMDA 兵庫（兵庫県）から医師 1 名、当日訓練の見学には航空医療研究所（大阪府）から 3 名、徳島県美馬市の協力医療機関であるホウエツ病院から 2 名の合計 10 名が参加されました。

AMDA は諏訪中央病院およびホウエツ病院とそれぞれ、2019 年に大規模災害に備えて連携協力を結んでいます。

医療救護所訓練風景
（諏訪中央病院のチームが対応中）

諏訪中央病院は、前日の 27 日に美馬市のホウエツ病院、吉野川市のさくら診療所を訪問。事前交流を行い、翌日の訓練に参加の運びとなりました。

（AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム
合同対策本部　本部長　大西　彰）

マレーシア・サバ州：農村地域における新型コロナワクチン接種プログラムを応援

10 月初旬、AMDA は現地協力団体であるマーシーマレーシアにコロナ禍における現地の状況について伺いました。夏には新型コロナウイルス感染拡大による都市封鎖の影響で、生活に困窮する人たちが支援を求め「白旗」運動が盛んに行われていたものの、今は運動も収まり、感染者数もかなり減少しているという報告がありました。同時に、ボルネオ島に位置するサバ州の農村地域で行われている「新型コロナワクチン接種プログラム」について紹介があり、AMDA はこのプログラムに対する支援を決定しました。

他の州と比較すると貧困率の高いサバ州は、地域によって交通手段が限られています。ワクチンの接種会場まで行くことができないため、農村部の住民は接種を受けられず取り残される可能性がありました。村によっては、ジャングルを 3 時間ほど運転しなければならない地域もあります。このような地理的要因を含む様々な事情により接種率が他州と比較し低迷していたサバ州において、マーシーマレーシアは同州保健福祉部が主導する農村地域ワクチン接種プログラムを支援するため、医療チーム（看護師 1 名、ボランティアスタッフ 5 名）を約 1 か月間派遣しました。接種率 60%以下であったサバ州ナバワン地区内 20 か所を訪問し、367 回分のワクチン接種を完了。目標としていたサバ州の接種率が成人人口の 80%に達したため、この支援活動は 11 月 2 日をもって終了しました。　（担当　岩尾　智子）

AMDA インド支部長、無料医療支援活動に参加

インド伝統医学アユルヴェーダ医師である、AMDA インド支部のセティクマール・カマト支部長は、地元の団体（Shrimad Bhuvanendra Thirtha Swami Charitable Trust）が実施する無料医療支援活動に参加しました。支援要請があった地域で毎月実施するこの活動では、診察・医薬品提供に加えて、血圧測定、血糖値測定、体重・身長・BMI 測定、視力および聴力検査なども必要に応じて行います。

10 月 31 日にはインド南部ケララ州コーチ、11 月 14 日にはカルナタカ州ウドゥピ地区カウプで支援活動が行われました。2 回の活動を通じて、医師、学生、セラピストから成る医療チーム（のべ 37 名）は計 321 人を診察し、関節痛、腰痛、消化器系の症状、喘息、肌のトラブルや精神的な悩みなどの健康問題に対応しました。患者は「家の近所で健康相談ができ、薬もいただけて嬉しい。感謝しています」と話しました。　（インド担当　岩尾　智子）

在大阪フィリピン共和国総領事　AMDA 訪問とお米贈呈

11 月 27 日、在大阪フィリピン共和国 ヴォルテール・D・マウリシオ総領事ご夫妻が AMDA の事務所をご来訪されました。

代表の菅波より、当日同席した大山マージョリー氏がアドバイザーを務める岡山倉敷フィリピーノサークル（OKPC）が行ったフィリピンでの災害支援協力について報告がありました。その後、菅波から総領事ご夫妻に対して、謝意が伝えられました。

総領事は、AMDA の評判を常に聞いており、「『バヤニハン』（フィリピン語で『相互扶助』）にまつわる精神文化を理解し、助けを必要する方々に対して支援を行う AMDA の実行力を高く評価している」と述べられました。また「日本人は奉仕の心や人への思いやりなどを幼少期から学んでいる。素晴らしい」とのお言葉をいただきました。

AMDA は毎年、支部のある国と地域の駐日大使館や総領事館に対して活動報告を行っています。その際、平素よりご理解、ご協力をいただいているお礼として、岡山県新庄村産の無農薬米を贈呈しており、この日もお米一式をフィリピン総領事ご夫妻に直接贈呈しました。（尚、他の関係各所へは、コロナの感染状況に鑑み、お米の贈呈を郵送で行っています）

（GPSP 支援局　総務担当　ブルックス　雅美）

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第31回
フィリピン大統領府　事務次官　グロリア　メルカド 様

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、フィリピン大統領府　事務次官　グロリア メルカド様(以降敬称略)です。　　(聞き手:AMDA フィリピン担当　岩尾　智子)

AMDA　AMDA との出会いをお聞かせください。

メルカド　2013 年に、私のルーツであるフィリピン・ボホール島を襲った M7.2 の地震に対する緊急支援活動がきっかけです。当時、政府教育機関であるフィリピン開発アカデミー（DAP）副学長兼大学院学部長を務めると同時に、緊急支援活動にも携わる海軍予備役ビサヤ地域の司令官も任されていました。長年の親友であり、DAP の教授でもあったエドアルド・ラカニエンタ医師より AMDA を紹介していただきました。その後 AMDA チームとマニラで合流し、被害が深刻だったボホール島マリボホックにて一緒に支援活動をしたのが最初です。数日でチームをフィリピンに派遣する AMDA のスピード感には驚きました。

協力協定締結時に（中：エバスコ氏、右：メルカド氏）

AMDA　2017 年、フィリピン大統領府と AMDA は協力協定を締結することができました。その際も、大統領府官房長官上級秘書（当時）としてメルカド氏に調整していただきましたね。

メルカド　AMDA が提唱する世界平和パートナーシップ（GPSP）構想をフィリピンで具現化したいという思いもあり、協力協定締結に向けて調整しました。この構想は、平和構築、健康増進、教育支援、生活支援の 4 分野におけるプロジェクトを通じて平和の実現を目指す取り組みです。平和を阻害する災害、貧困や紛争などの問題解決に向けて、国内外の信頼できる組織とともに、より多くの人に必要な支援を届けられる仕組みだと信じています。加えて、緊急支援活動を一緒に行い、2014 年に本部のある岡山で開催された AMDA 設立 30 周年式典に参加する中で、AMDA が信頼できるパートナーであることを確信していました。さらに、2013 年ボホール島地震緊急支援活動を行ったマリボホックの当時の市長が、2016 年に官房長官となったレオンシオ・エバスコ氏であったことも協力協定締結を実現できた要因です。彼は AMDA という団体と AMDA の支援活動のやり方を理解していました。

最初のボホール島地震緊急支援活動にて（中央：メルカド氏）

AMDA　2019 年に来日された際、広島大学で「ミンダナオ島における和平構築プロセス」についてお話しされた様子がとても印象的でした。その和平構築に対する情熱はどこからきていますか？

メルカド　初任地としてミンダナオに着任したのは 1979 年。当時はミンダナオ紛争の緊張が高まっていた時期でもありました。そこに住むことで人々の生活を目の当たりにし、ミンダナオの持つポテンシャルを感じました。和平構築に携わる中で、当初仕事上で関わっていた人たちと、いつしか顔の見える関係になり、その人たちの身の上に起こることを自分のこととして感じるようになり、情熱を注ぐようになりました。2019 年、和平プロセス担当大統領顧問室事務局長としてミンダナオ島の和平構築に関わることになった際、紛争に終止符を打ち、島の発展に道筋をつけることに注力しようと心に決めました。一人では成し得ませんが、多くの人が強い情熱を持って取り組むことで実現できると信じています。例えば、経済的理由から ISIS* の戦闘員にならざるを得なかった息子や夫を持つ女性たちが村八分にされている話を本人たちから直接伺いました。政府としてはフィリピン人である ISIS 関係者も通常の生活が送れるよう支援する義務があります。そこでそのような女性たちを対象とした生活支援事業を行うことになりました。

AMDA　今後の展望をお聞かせください。

メルカド　42 年間フィリピン政府職員として関わってきた繋がりを活かし、退職後も和平構築や緊急支援活動を含む人道支援活動に邁進します。特に近年、世界各地で多発している災害に対応するため、AMDA が準備を進めている「世界災害医療プラットフォーム・アジア・大洋州版」にも、フィリピンや ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国とのネットワークを存分に活かせるものと思います。

* イスラム教スンニ派過激組織「イスラム国」

フィリピン台風 18 号　被災者支援活動

緊急医療支援活動の様子

10 月 8 日未明にフィリピンの東で発生した台風 18 号は勢力を強めながら北西に進み、12 日午前 0 時（現地時間 11 日午後 11 時）、ルソン島の北に位置するフガ島に上陸。台風はその後海上に抜けたものの、各地で洪水や土砂災害などが発生し、死者 43 人、負傷者 5 人、行方不明者 16 人、被災した世帯は約 30 万世帯に上りました。（フィリピン政府発表）

この被害状況を受け、AMDA フィリピン支部は、”ALL-IN-ONE BAYANIHAN”（みんな一つになって助け合おう）と題し、当時 5,000 世帯が避難生活を余儀なくされていたラ・ウニオン州ルナ町にて被災者に対する医療・物資支援を決定。10 月 17 日、副支部長含む 7 人のメンバーは、活動地となる同町サントドミンゴ・ノルテ地区にて、フィリピン陸軍予備役やその他協力団体らと、1,213 人を診察し、必要に応じて無償で薬を処方しました。更に、米や麺類、缶詰などの食糧を 350 世帯に配布しました。

それから約 1 か月後、被災された方々は家を再建し、親戚や地元政府の支援により少しずつ元の生活を取り戻しています。一方で、コロナ禍による都市封鎖などの影響を受け、生活の糧を失ったのみならず、今回の台風被害による二重被害に苦しむ人たちがいまだにいます。困っている人たちを元気づけたいという思いから、AMDA フィリピン支部は地元団体と協力し、11 月 12 日、ラ・ウニオン州サンフアン町にて復興支援活動を実施。医師、看護師、医学生を含むボランティア 39 人にご協力をいただき、会場に集まった地域住民 110 世帯 608 人を対象に、無料診療や医薬品の無償提供、パンとビスケットの配布、子どもたちの学用品（ノート、鉛筆、鉛筆削り）やおもちゃの贈呈、炊き出しを行いました。またこれらに加えて、会場ではダンス大会が開催されました。（GPSP 支援局　総務担当　ブルックス　雅美）

おもちゃを受け取る子どもたち

フィリピン：街の生活を支える非正規労働者支援　～あなたがヒーローキャンペーン～

コロナ禍においてフィリピンの非正規労働者とその家族の多くは、衛生環境が悪く、混み合う場所で仕事をしており、医療へのアクセスもありません。日銭暮らしのため、都市封鎖や経済の混乱により極度の貧困に陥るリスクと常に隣り合わせです。実はこのような状況下で生活する非正規労働者が労働市場の大部分を占めています。AMDA フィリピン支部は協力団体とともに非正規労働者へ「あなたたちを見放していません。いつもありがとう。あなた方がヒーローです」というメッセージを伝えるキャンペーンを行いました。

第 1 弾は 9 月 13 日に行われ、フィリピン産業医学会（PCOM）マカティ支部らの協力のもと、AMDA フィリピン支部はマニラ首都圏マカティ市を通行する非正規労働者 125 人に感染対策セット（手指消毒液やマスク、ポカリスエット飲料など）と感染対策情報のチラシを手渡しました。

そしてクリスマスシーズンの 12 月 8 日、同支部は第 2 弾として、マカティ市に加え、マニラ首都圏の南東に位置するラグナの 2 カ所で非正規労働者、特に三輪駆動車運転手への支援を実施。PCOM マカティ支部・ラグナ支部やロータリークラブ・マニラ 101 らと協力し、パスタやマスク、手指消毒液などを合計 100 人に提供しました。

受け取られた方からは、「ありがとう。自分たちがしている仕事は大切だし、感謝されていると感じたよ」、「私たちのことを覚えてくれていてありがとう。今回物資を提供いただいて本当に幸せです。ありがとう」など、喜びの言葉をいただきました。

ナバロ AMDA フィリピン支部長は、「非正規労働者はコロナ禍において弱い立場に置かれており、健康か生活の糧かという選択に迫られています。AMDA フィリピン支部をはじめとした民間団体は、非正規労働者が庇護の対象であることを認識し、支援を行いました。コロナ禍においても、非正規労働者は本当に私たちの生活に欠かせない人たちであり、ケアが必要です」と述べました。

（フィリピン担当　岩尾　智子）

AMDA こども食堂支援プラットフォーム支援物資贈呈式

12 月 17 日、岡山きらめきプラザにて AMDA こども食堂支援プラットフォームの支援物資贈呈式を行いました。二部構成で、第一部は岡山ハーモニーライオンズクラブ様からカレー、パスタ等、様々な食料品を目録で寄付していただきました。同団体には 2018 年よりふるさと納税を活用した形でご支援いただいています。
第二部では、AMDA に対し、3 名の方々からお米計 300 キロをご寄付いただきました。また株式会社オーディナーレ代表取締役高口知子様より、たけのこご飯の素をご寄付いただき、お米とセットで贈呈しました。

こども食堂の方からは、「子ども、大人、高齢者、外国人が触れ合うことのできる場所、普段の生活で甘える場所がない子どもたちの居場所として、子ども食堂の存在は大きい」とのお話がありました。

今回、物資を希望したのは 10 団体でした。当日参加が叶わなかった 3 団体については AMDA 本部にて別途贈呈式を行いました。
（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

AMDA 中学高校生の活動：ギニアビサウ共和国へ文房具を送る取り組み

岡山県総社市の取り組みに協力して、AMDA 中学高校生会（以下、中高生会）は 9 月下旬からアフリカ・ギニアビサウ共和国へ送る文房具の寄付を募りました。これは同国オリンピック代表であるタシアナ・リマ・セザール選手の五輪事前キャンプを、総社市がホストタウンとして支援したことがきっかけでした。「祖国では子どもたちの教育に必要な文房具が不足している」とのタシアナ選手のお話を受け、総社市は文房具を送る取り組みをスタート。中高生会ではこれに対し、「少しでも役に立ちたい」とメンバーに呼びかけました。約一ヶ月の間、中高生会メンバーをはじめ、それ以外の方からもご協力いただきました。

10 月 25 日に寄付を締め切り、10 月 27 日、AMDA 本部にて、総社市職員の方に、中高生会の鈴村宙巧リーダーから片岡聡一市長へのメッセージを添えて、集まった文房具をお渡ししました。
（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

イオン「幸せの黄色いレシートキャンペーン」～イオン倉敷店～

毎月 11 日のイオン・デーは、「幸せの黄色いレシートの日」。イオンではお客様とともに地域のボランティア活動を支援する取り組みが続けられています。新型コロナウィルスの緊急事態宣言解除により、「幸せの黄色いレシートキャンペーン」の活動が再開されました。

今年 11 月 11 日に当キャンペーンへご協力いただけるよう AMDA のボックスを持ってイオン倉敷店の店頭に立ちました。平日でしたが、多くのお客様がお買い上げレシートをアムダの専用ボックスに投函いただき、ご協力くださいました。レシート合計金額の 1 パーセントにあたるご寄付は、緊急救援活動に必要な物品の購入に活用させていただいております。お客様からの温かいお気持ちを直接感じることのできる活動の場となりました。イオン倉敷店様をはじめ、多くの皆様のご協力をありがとうございます。

（AMDA 理事　難波　比加理）

フィリピン台風 22 号　被災者緊急支援活動

12 月 16 日午後、猛烈な台風 22 号（フィリピン名オデット）がフィリピンに上陸。同国中部のシアルガオ島に上陸後、レイテ島やボホール島、セブ島などを横断し、各地で甚大な被害をもたらしました。

17 日、AMDA は現地協力者であるフィリピン大統領府事務次官グロリア・メルカド氏（P4 参照）および AMDA フィリピン支部と情報収集を開始。日本からフィリピンへの医療チーム派遣は困難なため、現地で必要とされる支援を行うことを決定しました。

ボホール島での物資支援

1）ボホール島食糧支援

洪水や家の倒壊等の被害が著しいボホール島内 3 つの町で、フィリピン海軍に加え、大統領府事務官レオンシオ・エバスコ氏、フィリピン開発安全女性委員会と合同で食糧支援を実施。23 日、マリボホック町長に 50 キロの米 20 袋と缶詰などをお渡ししました。翌日にはロボック町、そしてウバイ市でも同様に支援を行いました。

2）シアルガオ島医療・食糧・物資支援

シアルガオ島での医療支援

最初に台風が上陸したシアルガオ島のデル・カルメン町コロ副町長より支援要請があり、AMDA フィリピン支部チームは 24 日に同島入り。フィリピンにとって 1 年の中で最も大切なクリスマスの 25 日、要請のあった 2 カ所で、医師 2 人による無料診療と薬の提供、食糧・物資支援、そして子どもたちを対象とした絵本の読み聞かせやぬり絵コンテストといったメンタルケアに関する活動も行いました。翌日には他の 2 カ所で医療支援やメンタルケアの活動を実施し、更に現地の診療所で新型コロナワクチン接種にも携わりました。

12 月 17 日ボホール島の様子（大統領府事務官エバスコ氏提供）

3）レイテ島・南レイテ州物資支援

約 9 万世帯が被災した南レイテ州、元知事の要請を受け、支援実施を決定。1 月 5 日現在、支援に向け、支援物資や食糧を準備しています。

尚、死者数 407 人、負傷者数 1,147 人、行方不明者数 78 人、約 124 万世帯 488 万人が被災し、今もなお、約 10 万世帯が避難生活を余儀なくされています（2022 年 1 月 5 日フィリピン国家災害リスク削減管理委員会発表）。　（フィリピン担当　ブルックス　雅美）

インドネシア土砂災害被災者緊急支援活動

現地時間 10 月 3 日午後、インドネシア・スラウェシ島の南スラウェシ州ルゥー県では豪雨により川の氾濫、複数の地域で鉄砲水や地すべりが発生。127 人が亡くなり、一時期 1 万 2,000 人もの人が孤立する事態となりました。

この深刻な状況を受け、5 日、AMDA インドネシア支部、ムスリム大学（Universitas Muslim Indonesia）医学部および AMSA ムスリム大学支部などから成る合同医療チーム（医師 2 人と医学生 4 人の計 6 人）を結成。医療チームは、同支部および同大学のあるマカッサルを出発し、陸路で翌日 6 日に被災地のルゥー県に入りました。同県副知事を訪ねたのち、ムスリム大学卒業生の地元医師と共に支援実施を決定。6 日および 7 日は、被災地に医薬品や食料品、日用品などを贈呈する一方、ノースワレンラン地区の 2 カ所で合計 49 人の被災者の無料診察と治療にあたりました。現地の報告によると、皮膚や急性の呼吸器系の症状、下痢や高血圧などの症状が見られました。

合同医療チームは 8 日に再びノースワレラン地区に戻り、医療支援が行き届いていなかった村のモスクの前など 2 カ所で無料診療を実施。その後、医療チームの情報を受け、チームの移動診療車を使ってボーン地区でも医療支援を行いました。この日は合計 133 人を診察しました。

翌日 9 日、チームは副知事に活動終了の報告を行い、帰途につきました。

（GPSP 支援局　総務担当　ブルックス　雅美）